

直方市文化芸術審議会 第3回会議 議事録

日 時	令和8年3月31日(火) 14:00 ~ 16:00
場 所	直方市中央公民館4階 第4学習室
出席者	小島 立 (会長) 牛嶋 英俊 (副会長) 市川 靖子 (委員) 曾根 富久恵 (委員) 鷲野 彰子 (委員) 商工観光課商工観光係職員2名
(事務局)	直方市長、文化・スポーツ推進課長、社会教育係長、社会教育係職員
傍聴者	1人
議題	(1) 第2回会議を踏まえた振興計画の修正案について (2) 観光×文化芸術

<p>◎議事録 (会長)</p>	<p>1. 開式</p> <p>本日は、足元の悪い中お集まりいただき、ありがとうございます。</p> <p>先ほど事務局からも説明がありましたとおり、本日は「文化芸術と観光の掛け合わせ」をテーマに議論を行う予定となっております。</p> <p>先ほどお配りした書籍について少し補足いたします。本書は数年前に、文化政策学を専門とする同僚の先生方とともに執筆したものであり、今回の文化芸術振興計画にも関係する内容となっております。文化政策の分野では、「著作権法」「文化財保護法」「図書館法」など、さまざまな法制度が関係しており、そうした観点から文化政策を捉える内容となっております。私自身は著作権を専門としている関係で執筆に参加し、全体としては4名による分担執筆となっております。特に読む期限等は設けておりませんので、今後の検討や手続きの際に、参考資料として適宜ご覧いただければと思います。</p> <p>それでは本日の議題に入ります。</p> <p>まずは、文化芸術振興計画の修正案について説明をいただきます。</p> <p>本修正案は、これまでの第1回・第2回会議での議論や、他自治体の事例等を踏まえて作成されたものです。</p> <p>事務局より説明をお願いいたします。</p>
<p>(事務局)</p>	<p>2. 議題 (1) 第2回会議を踏まえた振興計画の修正案について</p> <p>それでは、事務局より今回お示ししております文化芸術振興計画の修正案(第2回追記)についてご説明いたします。</p> <p>今回の修正は、第1回および第2回審議会での議論、ならびに委員の皆様からいただいたご意見、また他自治体の事例調査等を踏まえ、計画全体の構造を整理し直したものとなっております。なお、本資料は完成案ではなく、今後の議論を深めるためのたたき台として提示しているものです。本日は、修正の趣旨を中心にご説明させていただきます。</p> <p>まず一つ目は、直方市の独自性の明確化です。これまでの審議会において、「計画の具体性」や「本市らしさの打ち出し」についてご指摘をいただきました。そのため、本市の文化芸術振興を語るうえでの軸を改めて整理し、炭鉱の歴史という地域の「記憶」、市民が育んできた文化活動という「今」という2つの視点を中心に据えました。</p> <p>そのうえで、これらを総合的に表現するものとして、「記憶と今を、未来へつなぐ文化のまち 直方」という理念として整理しております。この理念については、現時点での整理であり、今後さらに議論を深めていただきたいと考えております。</p>

次に二つ目は、課題の捉え方の整理、いわゆる「循環」の視点の導入です。これまでの議論の中で、「活動はあるが広がりにくい」「担い手の固定化や後継者不足」「活動が特定のコミュニティ内で完結している」といったご意見をいただきました。

これらを踏まえ、課題を単に「活動が少ない」と捉えるのではなく、文化芸術活動が地域の中で十分に循環していない構造的な課題として整理しました。具体的には、「創造する人」「支える人」「参加する人」「発信する機会」これらが相互につながりながら広がる仕組みが十分ではないのではないか、という視点です。そのため、第2章では文化芸術を「人と人、分野と分野をつなぐ力」として位置付け、循環を意識した構成へと見直しております。

三つ目は、他分野との連携の明確化です。審議会の議論の中でも、文化芸術を文化分野の中だけで完結させるのではなく、社会全体の中で必要とされる存在として位置付ける必要があるという認識が共有されてきました。また、国や県の計画においても、多分野連携や地域活性化との接続が重視されています。こうした背景を踏まえ、第3章では、文化芸術を観光、福祉、教育などと連携する。横断的な基盤として位置付ける構成に整理しております。

四つ目は、理念と施策のつながりの整理です。これまでの案では、理念・課題・施策の関係がやや分かりにくい部分がありました。そこで今回の修正では、「理念→課題→目標→施策」という流れが見える構成へと整理しております。特に第3章では、「記憶を守り活かす取組」「今を支える取組」「未来へつなぐ取組」という観点を意識し、理念との連続性を持たせています。

最後に、今回の修正案の位置付けについてです。繰り返しになりますが、本案は完成案ではなく、これまでの議論を踏まえた構造整理案です。本日特にご議論いただきたい点としては、「本市の独自性の整理が妥当か」「循環という課題認識が適切か」「理念と目標の関係性が明確か」「他分野連携の位置付けが十分か」といった点になります。本計画は、今後5年間の文化芸術振興の方向性を示すものです。そのため、単なる事業の整理ではなく、持続可能な文化芸術のあり方をどのように描くかという点が重要になると考えております。今回の修正は、そのための土台づくりとして整理したものです。

本日は忌憚のないご意見をいただければと思います。よろしく願いいたします。

(会長)	<p>それでは、本計画の修正案につきまして、15分程度ご議論いただければと思います。ただいま事務局より説明がありましたので、ご意見等があればお願いいたします。特に主な論点としては、「文化的特性」「現状の課題」「基本理念・方向性」があるかと思います。</p> <p>また、資料の最後のスライドにも「本日も議論いただきたい点」として整理されておりますので、それらも踏まえてご発言いただければと思います。</p>
(委員)	<p>直方市の文化的特性について、炭鉱の歴史を中心に整理されている点は理解できるが、それ以外の歴史資源に関する記述が不足しているように感じます。</p> <p>例えば、「水町遺跡」「黒田藩に係る歴史資源」「中央公民館等に収蔵されている資料」など、地域には多様な文化財や資料が存在しているにもかかわらず、それらに関する記述が計画の中に見当たらなかったです。こうした点が反映されていないのは、ややもったいないと感じており、今後の計画には盛り込むべきではないでしょうか。</p>
(委員)	<p>直方の歴史について議論する際、どうしても炭鉱の時代から語られることが多いが、それ以前の歴史についても視野に入れる必要があると感じています。一般的に語られる歴史は、近代以降、特に炭鉱の時代に偏りがちであるが、専門的な視点から見ると、それ以前の歴史も重要である。具体的には、「宿場町としての歴史」「城下町としての成り立ち」といった背景があり、少なくとも江戸期以前からの流れを踏まえて整理することが、現在のまちの成り立ちを理解する上で重要であると思います。</p> <p>また、近代史の観点では「鉄道」の存在も重要である。直方は単に石炭を産出する地域というだけでなく、石炭を輸送する拠点（物流・交通の要衝）として発展してきた側面が大きい。そのため、文化的特性としては、炭鉱に加えて、鉄道や輸送機能といった視点も明確に位置付ける必要があると考えます。</p>
(委員)	<p>市内の文化資源については、各施設に貴重な資料が所蔵されている。例えば、市立図書館には、炭鉱の積み出しの様子や当時の町全体の景観を描いた鳥瞰図（吉田初三郎によるもの）が収蔵されています。</p> <p>こうした資料は、当時の地域の姿を視覚的に理解できる重要な資源であり、各施設に分散して存在している文化資源を、埋もれさせることなく、横断的に活用・発信していく視点が必要です。</p>

<p>(委員)</p>	<p>直方の地域アイデンティティについては、炭鉱のまちという側面だけでなく、「城下町」「宿場町」「商業地」としての歴史も重要である。特に、周辺地域から人や物が集まる商業の拠点として発展してきた経緯があり、明治期に至るまでその機能を担ってきた。このように考えると、直方は、「石炭産業の発展を支えた商業地であり、かつ交通の拠点であったまち」として整理することができるのではないかと考える。文化的特性の整理にあたっては、こうした多面的な歴史を踏まえた表現が望ましいと考えます。</p>
<p>(会長)</p>	<p>私から付け加えさせていただきます。</p> <p>先ほどのお話にも関連しますが、直方の歴史はさらに遡ることができるのではないかと感じております。実は私自身、一度自分の自叙伝のようなものを書く機会があり、生まれや地域の由来について調べたことがあります。その際に、「直方」という地名の由来について触れました。これは確か、室町初期の南北朝時代に関係しており、後醍醐天皇の皇子に由来するという説があると記憶しております。つい数週間前にも、NHKの歴史番組で関連する内容が取り上げられていたかと思えます。</p> <p>このように、さらに遡っていくと、この地域にはさまざまな歴史的背景があると考えられます。また、周辺には古墳などの遺跡も存在しており、遠賀川流域一帯は、かなり古い時代から人々の営みがあった地域ではないかと思われます。もちろん、計画に盛り込める内容には限りがあるとは思いますが、可能な範囲でこうした多様な歴史的視点を取り入れていただくと、より厚みのある内容になるのではないかと感じました。</p> <p>さらに、鉄道に関する話題として、かつて国鉄が選定した「主要な町」の一つに直方が含まれていたという話も聞いたことがあります。また、八尋館長が「直方駅はかつて東京駅よりも大きかった」といったエピソードを紹介されているのも印象的です。こうした鉄道の歴史やエピソードも、地域の特性を示す重要な要素であると改めて感じました。</p>
<p>(委員)</p>	<p>鉄道の観点で申し上げますと、当時の鉄道省においても、直方は非常に重要な拠点であったと認識しております。ジャンルとしても、鉄道の規模や機能の面で、全国的に見ても上位に位置するほどの規模だったのではないかと思います。</p> <p>また、水運や金融機能の発展についても、これだけの規模の都市機能が形成された背景には、鉄道の存在が非常に大きかったと考えます。例えば酒造業なども含めて、地域産業の発展に鉄道が大きく寄与していたのでは</p>

	<p>ないでしょうか。</p>
<p>(委員)</p>	<p>大変興味深いお話で、勉強になります。 もう少し補足して伺いたいのですが、なぜそこまで大きな拠点になったのか、その経緯についても重要だと感じました。</p>
<p>(委員)</p>	<p>やはり、周辺環境との関係、例えば海や川といった交通手段や地理的条件、また鉱山資源との関係などがどのように影響していたのか、そのあたりも整理できるとよいのではないかと思います。 私が子どもの頃の記憶になりますが、石炭を運ぶ貨車が何十両も連なった列車が走っておりました。それだけ大量の輸送が行われていたという点からも、鉄道がこの地域の中核的な役割を担っていたことが分かります。このように、石炭産業と鉄道は切り離せない関係にあり、地域の歴史として一体的に捉えていく必要があると考えます。</p>
<p>(会長)</p>	<p>加えて、現在の商店街についても触れさせていただきます。本日も通ってまいりましたが、アーケードのある商店街は非常に立派であり、歴史的な価値を感じました。また、長崎街道との関係も重要な視点だと思います。宿場町としての役割や交通の要衝としての歴史を考えると、長崎街道の存在も計画の中にしっかり位置付ける必要があるのではないかと感じました。 正直なところ、田川市や飯塚市の商店街と比較しても、直方の商店街は非常に立派であり、価値の高いものだと感じています。これは、直方がかつて商業都市として発展してきたこととも関係しているのではないかと思います。 また、アーケードの長さについても、かつては西日本で有数、あるいは大阪以西では最も長いと言われていたという話も聞いたことがあります。 私自身、商店街を何とか残していけないかと以前から考えており、本日も実際に歩いてきましたが、改めてその価値を感じました。</p>
<p>(委員)</p>	<p>長崎街道の宿場町としての歴史もあり、昭和初期の頃には旅館なども立ち並び、人の往来があったと聞いております。現在でも長崎街道を歩くグループが訪れており、案内表示なども整備されている状況です。 また、この地域は河川の合流地点でもあり、地形的にも人や物資が集まりやすい「集積地」としての特性を持っていたことが大きいと思います。 さらに、鉄道についても同様に、石炭輸送のために鉄道が早期に整備さ</p>

<p>(会長)</p>	<p>れ、若松方面などと結ばれていたことから、物資の流通拠点として発展してきた経緯があります。</p> <p>つまり、地理的条件（河川・街道）と鉄道の発展が重なり、この地域が重要な拠点となったと考えられます。</p> <p>鉄道の整備過程においては、関係者間での調整や競争などもあったと聞いておりますが、結果として直方に路線や拠点が形成され、多くの列車が発着する重要な場所となっていきました。</p> <p>ありがとうございます。</p> <p>今のご意見を踏まえますと、炭鉱や鉄道といった近代の歴史だけでなく、それ以前の長崎街道や宿場町としての歴史、さらに地理的条件も含めて整理することが重要であると考えられます。したがって、そうした点も含めて計画に記載していただけるとよいのではないかと思います。</p> <p>それでは、まず「独自性」の部分についてはこのあたりとさせていただき、時間の関係もございますので、一度全体を見た上で、必要に応じて戻って議論する形でもよろしいかと思います。</p> <p>続いて、二つ目の論点である「循環構造の弱さ」という認識についてですが、私としては非常に興味深い視点だと感じました。この点につきまして、ご意見やご質問がございましたらお願いいたします。</p> <p>少し時間もございますので、私の方から補足的に発言させていただきます。先ほど委員の皆様にお配りした書籍の中でも触れておりますが、私どもは文化芸術を「つくる・受け取る・残す」という一連の流れ、いわばエコシステムとして捉えております。今回事務局から示された「循環」という視点は、まさにこのエコシステムの考え方と重なるものであり、大変興味深く拝見いたしました。確かに、地域における文化芸術活動の量が少ないという点はあるかと思いますが、これはある意味やむを得ない部分もあります。東京や福岡と単純に比較することは適切ではなく、地域の規模に応じた在り方があると考えます。いわば、「身の丈に合った」取り組みというものが重要であり、必ずしも拡大路線を目指すことだけが良いとは限りません。</p> <p>一方で、世界的に見ても、小規模な地域であっても独自の魅力を持ち、輝いている事例は数多く存在します。したがって、「活動の量が多いか少ないか」という観点だけで地域の価値を測るのは適切ではなく、むしろ文化芸術が地域の中で好循環しているかどうか、つまりエコシステムとして機能しているかが重要であると考えます。その点において、今回の事務局の問題意識には非常に共感するところが多いと感じました。</p>
-------------	---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

<p>(委員)</p>	<p>それでは、この点につきまして、委員の皆様からご意見等がございましたらお願いいたします。</p> <p>私から申し上げますと、「循環」という考え方については、まさにその通りだと感じました。そのうえで、もう一つ重要な視点として「広報」があるのではないかと思います。つまり、地域の中で起きている活動を、どのように外に向けて発信していくかという点です。現在はホームページやSNSなど、さまざまな媒体がありますので、地域内の活動をしっかり外部に伝えていくことで、外から人や情報を呼び込むことも可能になると考えます。</p> <p>特に、規模の小さい自治体ほど、こうした発信力は弱くなりがちです。一方で、大きな自治体では、活動規模や予算も大きいので、仮に行政が主導しなくても、個々のプロジェクトが独自に広報を行い、多くの人の目に触れる機会が自然と生まれています。</p> <p>そのため、小規模な地域においては、地域内の活動をいかに外へ「見せるか」という視点を、より意識的に考えていく必要があるのではないかと思います。</p> <p>このように、地域内部だけで完結する循環だけでなく、外部との関係性も含めた循環、すなわち外から人や情報を取り込みながら発展していく「好循環」をつくっていくことが重要であると感じました。</p>
<p>(会長)</p>	<p>外部とのつながりについては、非常に重要である一方で、難しい側面もあると感じております。まちづくりや地域活性化の分野ではよく言われていることですが、まず大前提として、地域内で資源をしっかりと蓄積していくことが重要であるとされています。</p> <p>一方で、外部との関わり方には課題もあります。率直に申し上げますと、地域だけで完結するのが難しい場合、外部に頼らざるを得ない状況も出てきます。しかし、都市部のコンサルタントや外部事業者に依存しすぎると、イベントなどは実施できたとしても、地域内にノウハウや資源が蓄積されないという問題が生じる可能性があります。場合によっては、地域で実施したイベントの成果や利益が、結果として外部に流出してしまう、いわば「資源の流出」が起こってしまうという指摘もあります。</p> <p>そのため、外部との連携においては、「外から資源（外貨）を獲得する」という視点は非常に重要である一方で、それが地域外に吸い上げられてしまわないようにすることも同様に重要であると考えます。</p> <p>つまり、外部を活用しながらも、地域として主体性を持ち、しっかりと</p>

	<p>資源を地域内に蓄積していく仕組みづくりが求められるのではないのでしょうか。</p> <p>また、過去にはいわゆる「B級グルメ」や「ゆるキャラ」といった取り組みが全国的に広がりましたが、これらについても、どの地域でも似たようなものになってしまい、地域固有の魅力が十分に表現されていないのではないかという批判もありました。</p> <p>このような点も踏まえすと、外部との関わり方については、単に取り入れるだけでなく、「いかに地域の独自性を保ちながら活用するか」という視点が非常に重要であると感じております。</p>
(委員)	<p>例えば、同規模の自治体や、同様の課題を抱えている地域同士で連携するというのも、一つの方法ではないかと考えます。仮に福岡市のような大都市と連携した場合、どうしても人や資源がそちらに流れてしまう可能性もありますが、田川市や行橋市、北九州市（小倉地区）など、近隣で同じような課題を持つ地域と連携することで、相互に人の流れを生み出すことができるのではないかと思います。</p> <p>例えば、炭鉱の歴史をテーマにしたイベントや、地域のお祭り、神楽などの伝統行事を連携して実施し、それぞれの地域を回遊できるような仕組みをつくることも考えられます。その際には、バスを運行するなどして、複数の地域を巡る仕掛けを設けることも有効ではないかと思えます。</p> <p>このように、一つの自治体だけで取り組むのが難しい場合には、同じ課題を持つ地域同士で協力し、広域的に展開していくことも検討できるのではないかと感じました。</p>
(委員)	<p>「循環」という観点に関連して、現場の実感として感じていることをお話します。文化施設に仕事で来られる作家やアーティスト、また博物館関係者の方々に、「本日はどちらに宿泊されますか」と伺うと、多くの場合、「博多」や「北九州（小倉）」といった回答が返ってきます。直方市内にも宿泊施設はありますが、数が限られており、例えば部活動の大会などで団体利用が入ると、すぐに満室となってしまいます。そのため、結果的に市外に宿泊せざるを得ない状況が生じています。その結果、来訪者は直方に来て活動した後、すぐに市外へ移動してしまい、地域内での滞在時間が非常に短くなってしまいます。</p> <p>つまり、地域内で一定の消費はあったとしても、滞在による継続的な経済効果にはつながりにくい状況が見られます。</p> <p>本来であれば、もう少し地域内に滞在していただけると良いのではない</p>

	<p>かと感じていますが、仮に自分が観光客の立場で考えた場合、滞在中に立ち寄れる場所が十分にあるかという点には課題があると感じます。</p> <p>例えば、地域内の観光資源として挙げられる場所はあるものの、アクセス面や立地の問題から、徒歩で気軽に訪れることができる場所が限られている状況です。また、イベント等についても、週末（金・土・日）に集中しているため、日程が合えば満足度は高いものの、平日なども含めて継続的に人が回遊する仕組みをつくるには課題があると感じています。</p> <p>このような点から、来訪者が地域内に滞在し、回遊しやすい環境づくりが必要である一方で、現状では「循環」を生み出すことがやや難しい状況にあると感じております。</p>
(会長)	<p>本件は非常に重要な論点であると認識しています。</p> <p>ご承知のとおり、観光においては「滞在時間をどれだけ延ばすか」が重要であると従来から指摘されています。本日の後半の議論にも関わる内容であるため、引き続き検討を深めていきたいと思えます。この「循環（滞在・周遊）」の視点について、他にご意見があればお願いします。</p>
(委員)	<p>観光客を案内する際、宿泊場所の確保に苦勞することがあります。知人が来訪した場合も、どこに宿泊するかを個別に考える必要があり、受け入れ体制として十分とは言えない状況です。また、どのような観光客を呼び込みたいかによって、必要な宿泊施設の形態や価格帯も変わってくると考えます。団体客を受け入れるのか、個人旅行者を中心とするのかによっても整備の方向性は異なるため、その整理が必要だと思えます。</p>
(委員)	<p>以前存在していた「いこいの村」のような、複数人でゆったり滞在できる施設が現在はなく、受け皿が不足していると感じます。</p>
(事務局)	<p>いこいの村については、建物が旧耐震基準であることや、新型コロナウイルスの影響等もあり、現状では再開は困難な状況です。現在、当該施設の今後の活用について検討を行っており、観光施設としての活用も含めて検討している段階ですが、具体的な方針はまだ決まっていません。</p>
(委員)	<p>他地域では、空き家や古い町並みを活用し、滞在型観光を推進している事例があります。</p> <p>例えば、1週間程度滞在しながら陶芸やウォーキングなどの活動を行うような取り組みです。近年は、日本人・外国人ともに「地方に一定期間滞</p>

在してみる」というニーズも高まっており、そのような視点での観光施策も検討する価値があると考えます。

別府市にある「清島アパート」のように、アーティストが滞在しながら制作活動を行う「滞在制作型（アーティスト・イン・レジデンス）」の事例があります。この事例では、作家が一定期間滞在して制作を行い、最終的に作品を展示する取り組みが行われており、地域との関わりや文化発信につながっています。本市においても、商店街の空き店舗などを活用し、同様の取り組みができる可能性があると考えます。

空き店舗を活用して小規模なギャラリーや制作拠点を点在させることで、「まち全体を回遊する文化空間」とすることも可能ではないでしょうか。そうした取り組みは観光資源となるだけでなく、若い作家の育成や、将来的に外へ羽ばたいた人材が地域の魅力を発信することにもつながると考えます。

また、直方市商店街周辺には小学校も多く、子どもたちが日常的に行き交う環境があります。その中で文化活動が行われていれば、自然と子どもたちが触れる機会にもなり、教育的な効果も期待できると思います。

本市は、日帰りや1泊の観光地としてはやや弱い面があるかもしれませんが、長期滞在の拠点としては可能性があると考えます。

例えば、本市に滞在しながら福岡市など周辺地域へ移動するような使い方も考えられ、「拠点型滞在」の視点での活用も有効ではないでしょうか。

(会長)

循環の視点については、本日の議論全体に関わる重要なテーマであり、今後も繰り返し取り上げていきたいと考えています。時間の関係もありますが、続いて「理念と目標の関係性」および「分野間連携」についてご意見をいただければと思います。

まず、私自身他分野との連携については、非常に重要な視点であると考えています。いわゆる「文化のための文化」という考え方だけでは、現代においてはなかなか共感を得にくい状況にあります。むしろ、文化の力を活用して地域課題の解決につなげていくという視点が、現在求められているものであり、本計画においても期待されている点ではないかと認識しています。

次に、理念と施策の関係性についてですが、本計画における「循環」の考え方は、いわゆる PDCA サイクルのように、施策を実施し、その結果や課題を踏まえて改善し、再び施策へと反映させていくという考え方であると理解しています。このような循環を機能させるためには、「評価」の視点が極めて重要になります。文化政策における評価については、文化政

策の分野においても長年議論されているテーマであり、非常に難しい課題です。特に、文化や教育の分野は定量的な評価がなじみにくく、単純に数値で成果を測ることが困難です。そのため、来場者数などの数値を過度に重視すると、いわゆる大規模イベントや集客重視の事業に偏るおそれがあります。

しかしながら、そのような事業ばかりを実施すると、他地域と類似した内容になり、地域独自の文化的価値が損なわれる可能性もあります。

一方で、公費を投入している以上、文化関係者だけが自己満足的に活動しているのではないかという批判を招くことも避けなければなりません。

このように、「独自性」と「説明責任」の間でジレンマが生じる点が、文化政策の難しさであると認識しています。

したがって、本計画を推進していくにあたっては、適切な評価の在り方を検討することが不可欠であり、評価の仕組みがなければ、施策の改善や次の展開につなげることができません。単に同じ取り組みを繰り返すのではなく、段階的に発展していくことが求められます。そうでなければ、施策の意義そのものが問われることにもなりかねません。

また、文化分野は財政的に厳しい状況の中で、優先順位が下げられやすい分野でもあります。そのため、「なぜ文化に投資するのか」という説明が常に求められる領域でもあります。こうした背景も踏まえ、評価の在り方については、今後の議論においても継続的に検討していきたいと考えています。委員の皆様にも、ぜひこの点を意識していただきながらご意見をいただければ幸いです。

(委員)

やはり最終的なゴールとしては、他自治体のように様々な取組を行い、成功しているまちのように、直方市として何を打ち出していくのが重要になると感じています。そうなれば、「このまちはこれだけ取り組んでいるからこうなっている」と、誰もが納得できる状態になると思います。

一方で、「文化で人を呼ぶ」というのは非常に難しいことであるとも感じています。ただし、文化は一つの大きな武器になり得る分野であり、活用の余地は十分にあるのではないかと感じています。

また、直方市の強みとして、土地価格が比較的安く、住宅を取得しやすい点が挙げられます。さらに、小倉まで約30分、福岡市内へも1時間程度と交通アクセスが非常に良好であり、福岡空港・北九州空港の両方が利用できるなど、立地的にも非常に恵まれていると感じています。

このように、「住む場所」としては非常に魅力が高く、子育て世代や若い世代が将来戻ってきたいと思えるポテンシャルは十分にあると思いま

<p>(委員)</p>	<p>す。その中で、さらに文化的な付加価値が加われば、もともとの市民だけでなく、新たに移住してくる人にとっても誇れるまちになるのではないかと考えます。</p> <p>実際、商業施設もあり生活利便性は高く、交通面でも非常に優れています。他地域と比較しても、例えば宗像市や福津市などは人気がある一方で、交通の面では不便さを感じる部分もあり、その点では直方市の方が優れていると感じています。</p> <p>したがって、この「利便性の高さ」という強みを活かしながら、文化を掛け合わせていくことで、より魅力的なまちづくりができるのではないかと考えています。</p> <p>また、若い世代が「ここに住みたい」と思えるためには、教育の充実も重要な要素になると思います。この点も含めて、文化と他分野を掛け合わせた施策には大きな可能性があると感じています。</p> <p>ただし、現状としては様々な取組を行っているものの、その成果が目に見えにくいという課題もあると思います。他自治体と比較される中で、どうしても「成果」が求められる場面が多く、説明の難しさも感じています。</p> <p>例えば教育面においても、福津市の事例では、受験のために福岡市内まで通塾しなければならないなどの課題があると聞いています。そうした点を踏まえると、直方市が持つポテンシャルは決して低くなく、むしろ強みとして活かせる部分が多いと感じています。</p> <p>最終的には、「住みたいまち」にしていくことが重要であり、その中で文化が一つの軸となり得るのではないかと考えています。</p>
<p>(委員)</p>	<p>文化的な視点だけでなく、経済面や交通の利便性も含めて、「このまちは良い」と感じてもらえることが重要ではないかと思います。文化・経済・交通のバランスが取れているまちを一つの参考にしながら、今後、若い人たちが「住みたい」と思えるまちづくりを進めていく必要があるのではないかと考えます。</p> <p>また、そうしたまちづくりのベースとして、経済的な安定も重要な要素になると思います。経済的に不安を抱えている方々にとって、文化や芸術がどれだけ身近で、どれだけ幸福感につながるのかという点については、一定の課題があるのではないかと感じています。</p>
<p>(委員)</p>	<p>今のご意見のとおりで、文化というのは「下地」がないと、そもそも興味を持つこと自体が難しいのではないかと思います。普段から文化に親し</p>

	<p>んでいる環境があつてこそ、「もっと関わりたい」という意識が生まれるものだと思います。そのためには、やはり子どもの頃から文化に触れる機会をつくることが重要であると考えます。子どもたちが文化や芸術に触れる機会を設けることは、まちへの愛着を育てることにもつながるのではないかと思います。大人になってからではなく、小さい頃から体験することが大切だと感じています。実際に子どもの頃に体験したことは、強く記憶に残るものです。例えば、小学校に入る前後の時期に体験したことが、その後の興味関心につながるケースも多いと感じています。</p> <p>ただし、単発の体験だけではなく、継続的に関われる仕組みが必要ではないかとも思います。その点で言えば、直方谷尾美術館の取組は非常に良い事例だと思います。子どもスタッフを募集し、長年にわたって子どもたちが美術に関わる仕組みを続けている点は、他にはあまり見られない特徴だと感じています。このような取組を通じて、子どもたちが成長していく過程を見ることができるのは非常に意義があり、今後も大切にしていきたいと思います。</p>
(会長)	<p>私の進行の不手際もあり、十分に議論の時間を確保できず申し訳ありません。</p> <p>本件につきましては、本日1回で結論を出せるものではないと考えております。事務局の皆様が作成された内容については、文化政策の観点から見ても非常に興味深く、また方向性としても大変良い提案であると感じております。好感を持って拝見しております。</p> <p>このような計画は、一度で完成させるものではなく、議論を重ねながら何度もブラッシュアップしていくことが重要であると考えております。今後の会議においても、引き続き皆様からご意見を頂戴し、より良い内容にしていければと思います。本日いただいたご意見につきましても、今後の検討の参考とさせていただきます。ありがとうございました。</p>
(事務局)	<p>それでは、次の議題に移ります。本日の二つ目のテーマは「観光との掛け合わせ・連携」についてです。</p> <p>ここで、進行表のとおり5分程度の休憩を挟みたいと思います。14時46分頃まで休憩とし、その後、再開させていただきます。</p>
(会長)	<p>3. 議題(2) 観光 × 文化芸術</p> <p>本日は、観光分野の現状と課題について理解を深めるため、商工観光課</p>

<p>(商工観光課)</p>	<p>の皆様にお越しいただいております。まずはご説明をお願いできればと思います。</p> <p>観光の現状や観光基本計画、今後の方向性についてご説明いただいた上で、その後、文化芸術との連携や掛け合わせの可能性について議論を進めていきたいと考えております。</p> <p>それでは、商工観光課の皆様、本日はよろしく願いいたします。</p> <p>商工観光課の奥田と申します。甲斐と申します。本日はよろしく願いいたします。</p> <p>本日は、観光分野の現状と課題について簡単にご説明させていただきます。また、事前にいただいておりますご質問についても、あわせて回答させていただきますと思います。</p> <p>現在お配りしております資料は2点で、観光基本計画の概要版と観光パンフレットとなっております。正式な計画書につきましては別途ご用意しておりますので、ご希望があればお申し付けください。観光基本計画につきましては、令和8年度が見直しの時期となっており、令和9年度から後期計画（第2期）へ移行する予定です。この1年間でKPIの検証等を行いながら、新たな目標設定を進めていくこととなります。</p> <p>また、観光パンフレットにつきましては、3年前にリニューアルを行い、今回最新の内容に更新しております。基本的な構成は大きく変えておりませんが、閉店した店舗や新規出店した店舗の情報を反映し、最新の情報に差し替えております。今年度は中間見直しの時期でもあるため、今後はページ構成の見直しも検討しているところです。最近の動きとしては、市内の企業による新たな直売店のオープンなどもあり、そうした情報も掲載しております。本パンフレットは特定分野に特化したものではなく、市内の観光資源を幅広く掲載した内容となっております。</p> <p>観光の推進体制についてですが、本市では一般社団法人の観光物産振興協会と連携し、両輪で事業を進めております。行政としては大きな観光の方向性や枠組みを示し、具体的な事業展開や商品化については協会が担うという役割分担で取り組んでおります。</p> <p>現在の主な観光資源としては、開催中のチューリップフェアが最も大きな集客イベントであり、今年で30回目を迎えます。そのほか、福智山ろく花公園、キャンプ場、高取焼の普及なども観光施策として取り組んでおります。一方、観光物産振興協会では、地元事業者との連携や、来年度に向けたバスツアーの企画などを進めております。</p> <p>次に、文化芸術との連携の可能性についてです。観光としては、市内外</p>
----------------	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

や県外からの来訪者を増やすことが重要な目的となりますが、そのためには「体験型コンテンツ」が非常に重要であると考えております。美術館やホールなどの施設については、もともと関心のある方でなければ来訪につながりにくい側面があるため、観光としては「そこでしかできない体験」をいかに提供できるかが重要になります。

具体的には、陶芸体験や、商店街にある染物店での染物体験など、地域資源を活かした体験型プログラムの充実が必要であると考えております。また、石炭記念館などについても、既に関心のある方だけでなく、興味のない方にも足を運んでいただき、その後に関心を持ってもらえるような仕掛けが必要であると感じています。

現在、文化芸術と関連する取組としては、高取焼や山笠などがありますが、観光としてはPRには関わっているものの、イベントそのものへの関与は限定的な状況です。ただし、一部の山笠については連携して実施しております。

また、今年度から新たに花をテーマとした取組を強化しており、高校生による花壇コンテストや、植物関連事業者と連携したイベントの開催、市役所や駅での生け花展示などを実施しております。さらに、今後は石炭やSLといった歴史資源についても、観光資源としての活用を検討しており、当時の時代背景に合わせた体験型プログラムの創出なども視野に入れております。

一方で、観光分野における課題についてもいくつかございます。まず、本市においては「直方市でしか体験できない」といった唯一性のある観光資源が少ない点が課題です。例えば石炭関連についても、筑豊地域全体での資源であるため、広域連携の中で活用していく必要があると考えております。

また、過去にサイクリングを活用した観光施策にも取り組みましたが、地域における自転車文化の定着が十分でなかったことや、継続的に支える民間主体との連携が不十分であったことから、定着には至りませんでした。この経験から、行政主導の単発イベントだけでは持続的な効果は得られにくいという認識を持っております。

さらに、地域内で活動している民間団体や個人の取組について、十分に把握・連携できていない点も課題であり、こうした情報を収集・活用していく必要があると考えております。

最近の観光施策においては、「ターゲット設定（ペルソナ設定）」が非常に重要視されています。例えば、イベントを企画する際に、市民向けなのか、市外からの集客を目的とするのか、ファミリー層なのか若年層なのか

<p>(事務局)</p>	<p>といったターゲットを明確にすることで、内容や広報手法が大きく変わってきます。ターゲットが不明確なままでは、結果的に万人向けで印象の薄いイベントになりがちであり、「ここでしか体験できない価値」を打ち出すことが難しくなります。そのため、今後は関係者間でターゲットを共有しながら事業を進めていくことが重要であると考えております。</p> <p>最後に、文化芸術との連携についてですが、すべての人に向けたものではなく、特定のターゲットに強く訴求できる取組を行うことが重要であると考えております。その方が広報面でも効果的であり、印象に残る取組につながると考えています。</p> <p>また、事業の目的としても、「一度きりの体験で満足してもらうのか」「リピーターを獲得するのか」によって、内容は大きく変わってきます。チューリップフェアや花火大会はリピート型のイベントである一方、陶器まつりなどは一度の来訪でも満足度を重視する傾向があります。</p> <p>このような違いも踏まえながら、今後は観光課としてイベントの実施主体というよりも、全体のブランディングを担う立場として関わっていく必要があると考えております。</p> <p>以上、簡単ではございますが説明とさせていただきます。ご質問等ございましたらお願いいたします。</p> <p>ありがとうございます。私より少し補足させていただきます。</p> <p>先ほどご説明いたしました花壇コンテストについてですが、これは市民文化祭の一環として実施している事業でございます。市民文化祭の会場であるユメニティのロビーにおいて、高校生による花壇作品を展示し、来場者の皆様に投票いただく形で審査を行い、入賞作品を表彰するという取り組みでございます。</p> <p>また、生け花の展示につきましては、市内の生花店や華道関係者のご協力のもと、市庁舎1階での展示からスタートし、現在は駅構内にも展開を広がっております。地元の華道教室の皆様にもご協力いただきながら、文化と観光をつなぐ取り組みとして進めているところでございます。</p> <p>もう一点、SL（蒸気機関車）関連の取り組みについて補足いたします。現在、来年度を目途に、図書館付近へのSL車両の移設・設置を検討しております。設置場所としては、図書館南側出口付近のスペースを活用し、来館者の目に触れる形での展示を想定しております。</p> <p>このSL展示を契機として、石炭や鉄道に関する観光資源と文化資源を組み合わせた事業展開を図りたいと考えております。</p>
--------------	----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

<p>(会長)</p>	<p>ありがとうございます。今のご説明の中で、図書館や石炭記念館といった施設との連携というお話がございましたが、例えばSLを活用した取り組みとして、定期的に関連図書の特集展示を行うことや、石炭記念館と連動した企画展示などを実施することも有効ではないかと考えます。SLというテーマは単なる展示にとどまらず、石炭産業や鉄道輸送の歴史、さらには当時の産業構造や地域の成り立ちなど、多面的に学びを広げることができる素材であると思います。</p> <p>例えば、図書館において関連書籍を集めたコーナーを設置したり、石炭記念館と連携したイベントや展示を行うことで、より深い理解や関心の喚起につながるのではないのでしょうか。</p> <p>また、こうした取り組みは教育分野とも親和性が高く、子どもたちの学びの場としても活用できる可能性があります。SLという切り口を起点に、文化・観光・教育が連携した展開が期待できると考えております。</p>
<p>(委員)</p>	<p>勉強になります。いくつかお伺いしたい点がございますが、まず一点確認させてください。</p> <p>先ほどご説明のありましたチューリップフェアに関連する花壇コンテストについてですが、高校生を対象として実施されているとのことでした。ターゲットを絞った取り組みであると思いますが、高校生を対象とされた意図や目的について、どのようにお考えかお聞かせいただけますでしょうか。</p>
<p>(商工観光課)</p>	<p>直接の担当ではないため、多少認識にずれがあるかもしれませんが、経緯をご説明させていただきます。</p> <p>さかのぼりますと、約30年前に本市が「花の都市宣言」を行っており、その取り組みが一つの背景にございます。近年はやや意識が薄れていた時期もありましたが、改めてその理念を掘り起こし、「花」をテーマとした取り組みを進めているところです。その中で、若い世代、特に高校生や女性の方々の感性やセンスを活かした事業展開ができないかという考えがありました。</p> <p>また、本市では花公園の指定管理を行っており、指定管理者の中に植物や花に関する専門的な知見を持つ方がいらっしゃいます。その方々と相談する中で、「寄せ植え」などの体験型コンテンツのアイデアが出たことが、今回の花壇コンテストの発端となっております。</p>
<p>(委員)</p>	<p>先ほどの話題にも関連しますが、事業を進めるにあたっては、子ども、</p>

<p>(商工観光課)</p>	<p>特に小学生くらいの世代も参加できるような仕組みがあると良いのではないかと感じました。小学生が参加できる内容であれば、保護者の関心も高まり、結果として幅広い世代の参加につながるのではないかと思います。</p> <p>もう一点お伺いします。現在検討されている SL・石炭関連の事業についてですが、どのような意図で、どの範囲まで取り組もうとされているのか、お考えをお聞かせいただけますでしょうか。</p> <p>本事業につきましては、観光物産振興協会の来年度事業として計画しているものであり、現在は具体的な事業内容を整理している段階です。市としては、SL や石炭をテーマとした取り組みを進めていく方向で検討しておりますが、単に SL や石炭記念館を巡るだけではやや魅力が弱いのではないかという課題認識があります。そのため、もう一つアクセントとなる要素を加える必要があると考えており、現在検討を進めているところです。</p> <p>また、石炭や鉄道といったテーマは本市単独にとどまらず、筑豊地域全体に関わるものであることから、広域的な連携も視野に入れて検討していきたいと考えております。</p> <p>さらに、観光において重要となる「体験」の要素を取り入れることも検討しており、例えば染物体験や、仏壇修復などの伝統技術に関する体験コンテンツを組み合わせることができないか、現在模索しているところです。</p>
<p>(委員)</p>	<p>ありがとうございます。まだ構想段階とのことですが、SL や石炭に特化した内容にするだけでなく、陶芸や食など、さまざまな要素を組み合わせることで、来訪者が「ついでに立ち寄ってみよう」と思えるような仕掛けが重要ではないかと感じました。</p> <p>また、体験型の要素を取り入れることで、興味の入口を広げ、他の分野への関心にもつながる可能性があると思いますので、そうした視点も含めて検討いただければと思います。</p> <p>一点お伺いしたいのですが、先ほど高取焼の陶芸体験について、「一度の体験で終わってしまうのではないか」というお話がありました。確かに体験自体は一度で満足される面もあると思いますが、その後に作品を購入する楽しみなどを通じて、継続的に訪れるきっかけをつくることもできるのではないのでしょうか。</p> <p>例えば、私自身も小石原には定期的に訪れており、イベントなどをき</p>

<p>(商工観光課)</p>	<p>かけに何度も足を運びたくなる魅力があります。作る体験だけでなく、「買う楽しみ」や「定期的に訪れたいくなる仕掛け」としてイベントを展開していくことも重要ではないかと感じました。</p> <p>高取焼についてご説明させていただきます。本市の高取焼は、2年前に福岡県知事指定の工芸品として認定を受けております。ただし、高取焼の工房は県内各地に点在しており、直方市が発祥であるという強みはあるものの、「高取焼＝直方」という認知が十分に浸透していない点が課題となっております。そのため、現状では小石原など他地域へ来訪者が流れている傾向があり、観光誘客の面で弱さを感じております。</p> <p>また、他地域では陶芸体験に力を入れている一方で、本市の事業者は「制作して待つ」スタイルが中心であり、外部への発信や集客の面で課題があります。展示会などへの出展も行っておりますが、どうしても既に興味を持っている方が中心となるため、新たな層へのアプローチには限界があります。</p> <p>今後は、高取焼の歴史や魅力を広く伝え、これまで関心のなかった方にも興味を持っていただくことが重要であると考えております。</p>
<p>(委員)</p>	<p>高取焼のイベントについては、年に1回または2回程度開催されているのでしょうか。</p>
<p>(商工観光課)</p>	<p>はい。高取焼の陶器まつりは、事業者主体で開催されており、行政は後方支援という形で関わっております。春(4月末)と秋(10月末)の年2回開催されており、それぞれテーマを設定して新作を制作・発表しております。例えば、直近では「小鉢」や「茶碗」などをテーマにした展示・販売が行われております。</p> <p>また、時期的には他地域のイベントとも重なるため、一定程度の来訪者の回遊は確認されています。</p>
<p>(委員)</p>	<p>例えば、複数のイベントを組み合わせることで回遊できるようにしたり、バスなどで移動しやすくする仕組みがあると、より効果的ではないでしょうか。</p>
<p>(商工観光課)</p>	<p>交通手段については、コミュニティバスの活用なども検討しましたが、公共交通としての導入は難しい状況です。現状では来訪者の多くが自家用車での来訪となっており、イベント時限定のバス運行などについては、今</p>

	<p>後の検討課題と認識しております。</p>
<p>(委員)</p>	<p>観光案内機能についてですが、以前は駅前に観光案内所があったかと思いますが、現在は市役所内に移っている状況ですよね。やはり観光客にとっては駅前に拠点があった方が利便性は高いのではないかと感じます。</p>
<p>(商工観光課)</p>	<p>観光物産振興協会は一般社団法人であり、行政とは別組織となりますが、現在は市役所内に拠点を置いております。市としても、観光案内機能は本来駅前にあるべきであると認識しており、将来的な移転については検討しております。</p> <p>ただし、現状の課題として、土日祝日に開所できていない点があり、観光客対応としては大きな課題と考えております。市役所内に拠点がある関係上、運営上の制約もあり、今後の体制整備が必要と認識しております。</p>
<p>(会長)</p>	<p>観光の観点について一点お伺いします。まず、来訪者はどのような交通手段で来られているのでしょうか。美術館の場合は自家用車で来館される方が多い印象がありますが、直方市はエリアによっては駐車場が有料であったり、スペースが限られていたりします。一方で、別の地域では無料駐車場が充実しており、人を集めやすい環境もあります。</p> <p>そのような中で、公共交通機関を利用される方がどの程度いるのか、傾向が分かれば教えてください。</p>
<p>(商工観光課)</p>	<p>詳細な分析については現在も継続しているところですが、人流データ分析やアンケート調査を活用して把握しています。観光基本計画の本冊には調査結果も掲載していますが、イベント時の来訪者は、最も多いのは北九州市、次いで福岡市となっており、近隣地域からの来訪が大半です。交通手段としては、ほとんどが自家用車と認識しています。ただし例外として、花火大会の際は鉄道利用が非常に多く、交通事業者の売上も大きく伸びると聞いています。</p>
<p>(会長)</p>	<p>ありがとうございます。例えば、直方イオンには多くの来訪者が来ていると思いますが、そこから市内の他の観光地へ誘導するような取り組みはこれまで検討されていますか。</p>
<p>(商工観光課)</p>	<p>正直なところ、現状では課題が大きい部分です。イオンに来られる方の多くは、買い物や飲食を目的としており、そこから他の観光地へ回遊して</p>

	<p>もらう流れは十分に作れていません。</p> <p>また、市内の観光施設として挙げられるもち吉の団子村（直売施設）やその他の施設についても、いずれも車での移動が前提となる立地にあります。そのため、公共交通機関で来訪された方の回遊は難しい状況です。</p> <p>一方で、最近の動きとしては、花公園についてファミリー層向けの施策を強化しており、「イオンに来訪した方が花公園へ立ち寄り」「花公園の利用後にイオンや他施設へ向かう」といった一定の回遊は見られるようになってきています。</p> <p>しかしながら、もち吉団子村など個別施設への広がりまでは十分ではなく、市全体としての回遊性向上には至っていないのが現状です。</p> <p>そのため、今後は「車で来訪した方を、いかに市内で複数の観光資源へ誘導するか」が重要な課題であると考えています。</p>
(委員)	<p>観光客の多くが自家用車で来訪している現状を踏まえると、やはり車での来訪を前提にしないと、今後の伸びは難しいのではないかと感じています。</p> <p>一方で、文化施設周辺の駐車場は十分とは言えず、来訪のハードルになっているのではないのでしょうか。例えば、郊外型施設のように広い駐車場を整備するという考え方もあるのではないかと思います。また、駅前エリアなど中心市街地との関係についてもお伺いしたいと思います。</p>
(会長)	<p>今のご指摘に関連して、中心市街地の再活性化は観光だけの問題ではなく、まちづくり全体の課題でもあると認識しています。回遊性を高めるといふ観点では、「車で来訪する人」と「中心市街地」の相性があまり良くないというミスマッチも感じています。結果として郊外型の施設に人が流れていく構造になっていますが、それ自体が悪いということではなく、中心市街地をどう活用していくかが重要な論点だと考えています。</p>
(商工観光課)	<p>中心市街地の活性化については、商店街も含めて取り組んでいるところです。現状としては、イオンモールなどの郊外型商業施設において、日常生活に必要な買い物はほぼ完結しており、この流れは全国的にも一般的なものと認識しています。</p> <p>その一方で、中心市街地には、商店街、美術館、石炭記念館、図書館、ユメニティ（文化施設）、複数の駅といった資源が集積しており、これらを活かして魅力を高めていく必要があると考えています。</p> <p>ただし課題として、そもそも中心市街地周辺に住んでいる方でさえ、車</p>

	<p>で郊外に出てしまい、歩いて回遊する習慣が少ないという実態があります。</p> <p>また、若年層の視点では、高校生から「気軽に立ち寄れる飲食店や居場所が少ない」といった声も聞いており、放課後に滞在できる環境づくりも課題の一つです。</p> <p>こうした点から、日常的に人が滞在できる場所づくり、文化芸術と組み合わせた魅力づくりを進めることで、居住者と来訪者の双方にとって魅力あるエリアにしていく必要があると考えています。その結果として、人の流れが生まれれば、駐車場整備の必要性も含めた次の段階の議論につながるのではないかと考えています。</p>
<p>(委員)</p>	<p>先ほどサイクリング事業が定着しなかったというお話がありましたが、中心市街地に人を呼び込む手段として、サイクリングを改めて活用する可能性もあるのではないかと思います。例えば、車で来訪した方が自転車に乗り換えて回遊する仕組みなど、導線の作り方によっては新たな展開も考えられるのではないのでしょうか。難しい点もあるとは思いますが、サイクリングの活用について改めて検討してみる価値はあると感じました。</p>
<p>(商工観光課)</p>	<p>人の流れがもう少し生まれてくれば、高校生向けの店舗なども増えていく可能性があるのではないかと感じました。また、サイクリングについては、これまでの取り組みは順序が逆だったのではないかと考えています。日頃から自転車に乗る人（サイクリスト）をターゲットにしていたため、来訪手段も自転車が前提となっており、ターゲットが限定的であったと認識しています。</p> <p>本来、観光として取り組むのであれば、車や公共交通で来訪した方が気軽に自転車を利用できる環境整備が必要であり、駅前でのレンタサイクル、シェアサイクル（例：福岡市のような仕組み）といったインフラが不可欠であると考えています。そのため、ハード整備にはなりますが、遠方から来訪された方の移動手段を確保することが、再スタートのポイントになると考えています。</p> <p>現在はサイクリング事業としては一旦終了していますが、今後については、観光協会が中心となりレンタサイクル事業を実施すること、福岡県が令和8年度以降にレンタサイクル拠点整備を進める方針であることを踏まえ、本市への導入も働きかけているところです。</p>
<p>(委員)</p>	<p>ありがとうございます。サイクリングに限らず、街歩きや山歩き、釣り</p>

<p>(商工観光課)</p>	<p>など、自然や食、歴史なども含めて多角的に楽しめる要素が見える形にしていくことで、「行ってみたい」と思えるまちになるのではないかと感じました。</p> <p>観光については、「魅力があるから人が来るのか」「人が来るから魅力が生まれるのか」という、いわゆる“ニワトリが先か、卵が先か”の関係にあると認識しています。そのため、行政としては特定の店舗を誘致するというよりも、まずは来訪者の回遊を促す仕組みづくりを進めることで、結果として事業者の出店につながる環境を整えることが重要であると考えています。</p> <p>また、高校生については、電車待ちの時間を過ごせる場所、気軽に飲食できる場所といったニーズがあることは把握していますが、現状では事業者の出店には十分つながっていません。その要因の一つとして、大学生等と異なり長期休暇期間に利用が大きく減少することがあり、安定した収益を見込みにくい点が挙げられます。さらに、土日や夜間に営業している店舗が少ないこともあり、「行く場所がない」といった声も聞かれている状況です。</p>
<p>(委員)</p>	<p>高校生だけでなく、一般の方も利用できるような“居場所”としての機能を持たせることで、事業者にとっても出店しやすい環境になるのではないかと思います。単なるターゲット設定だけでなく、幅広い層が利用できる仕組みづくりが必要ではないでしょうか。</p>
<p>(会長)</p>	<p>また、先ほどの議論に戻りますが、イオンに来訪した方が中心市街地へ流れてくるような仕組み、例えば駐車場の整備などがあれば、事業者にとっても出店のきっかけになる可能性があるのではないかと感じました。</p> <p>私の話で恐縮ですが、私が子どもの頃、父と二人で自転車で飯塚まで行って帰ってくるようなことをしておりまして、そういった意味では、サイクリングも広域的に活用できる可能性があるのではないかと感じています。例えば片道でもよいので、飯塚から来て直方で楽しんでいただくといった形で、回遊の一つの手段として考えられるのではないのでしょうか。</p> <p>また、先ほどから工芸の話も出ておりますので、そういった地域資源とも組み合わせることで、より広がりが出るのではないかと思います。</p>
<p>(商工観光課)</p>	<p>ご指摘の点につきましては、まさに福岡県が現在進めようとしている方向性と一致しております。ただ、市単独で実施する場合、貸出と返却の間</p>

	<p>題が大きな課題となります。どうしても「借りた場所に返す」という前提になってしまうため、片道利用が難しいという点があります。福岡県が整備した遠賀川のサイクリングロードについても、整備後の反省点として「往復利用が想定されていない」という課題が挙げられております。そのため現在は、同一事業者のもとで複数の拠点を整備し、「どこで借りても、別の場所で返却できる」といった広域的な仕組みの構築が検討されております。市としても、そのような仕組みが実現されることを期待しているところです。</p>
(委員)	<p>海外では、自転車を電車やバスに載せることができる仕組みもありましたので、そういった方法も一つの可能性ではないかと思えます。</p>
(商工観光課)	<p>平成筑豊鉄道においても、近年そのような取り組みは行われておりましたが、事前予約制であることや、帰りの時間が読めないといった課題があり、利用の定着には至っていない状況です。特に日帰り利用の場合、帰りの時間が確定できないため、復路の予約が難しいという問題がございます。</p>
(会長)	<p>また、河川敷の活用についてもお伺いしたいのですが、地元の方にとっては当たり前でも、外から来た人にとっては非常に魅力的なロケーションだと感じます。</p>
(商工観光課)	<p>遠賀川河川敷については、外部からの評価は非常に高いと認識しております。特にキャンプ利用の観点では、市街地の中にありながら自然を感じられるという点で、特徴的な場所となっております。河川敷のキャンプ場は今年度から有料化された影響もあり、利用者数は一時的に減少していると聞いておりますが、立地としては、近隣にコンビニやスーパーがあり、また治安面でも安心感があることから、引き続き強みとして活かせる資源であると考えております。</p>
(事務局)	<p>補足いたしますが、特に、バイクでツーリングをされる方にとっては、「市街地の中にあるキャンプ場」という点が珍しく、一定の評価を得ており、バイク雑誌等にも掲載されていると聞いております。</p> <p>一方で、「龍王峡キャンプ村」につきましては、山間部に位置する施設であり、利用者層が大きく異なっております。宿泊利用については近年減少傾向にありますが、日中の水遊びなどの利用は増加しております。背景</p>

<p>(会長)</p>	<p>としては、キャンプ需要そのものが落ち着いてきていることや、近年はグランピングのような、より手軽に楽しめるアウトドアが人気となっていることがあると考えております。</p> <p>現状の施設は従来型のキャンプ場であるため、時代のニーズとのズレが生じている可能性も課題として認識しております。</p> <p>宿泊に関してですが、現状としてビジネスホテル等に宿泊される方は、結局近隣自治体に流れているのではないかという問題意識があります。駅前に宿泊施設が少ないという点については、前半の議論でも話題に出ておりましたが、その点についてどのようにお考えでしょうか。</p>
<p>(商工観光課)</p>	<p>まず課題として挙げられるのは、駅前に宿泊施設がないという点でございます。宿泊施設を整備するためには、ある程度まとまった敷地が必要となるため、結果として駅前から離れた立地になりがちであり、その点については懸念しております。</p> <p>一方で、宿泊需要に対して供給が不足しているという声は、現時点では特段把握しておりません。「泊まれなかった」といった苦情等も特に寄せられておらず、キャパシティとして不足しているという認識はございません。ただし、駅前エリアに宿泊機能があれば、回遊性の観点からも望ましいとは考えております。</p> <p>しかしながら、新たに宿泊施設を整備することは容易ではなく、民泊についても制度上は可能であるものの、事業として継続できるかという点には課題があると認識しております。</p> <p>また、古民家再生による宿泊施設についても可能性はあるものの、改修費用が高額になることがネックとなっております。</p>
<p>(会長)</p>	<p>例えば古民家再生で高付加価値型の宿泊（1泊数万円程度）といった事例も他地域では見られますが、そのような方向性についての検討はあるのでしょうか。</p>
<p>(商工観光課)</p>	<p>現時点で観光課として宿泊に特化した施策は具体的には検討しておりません。過去には商工会等による補助制度を活用し、コワーキングスペース整備の中で宿泊機能を持たせた事例が1件ございます。具体的には、古民家を改修し、コワーキングスペース兼民泊施設として活用しているケースがあり、外国人の利用も一定程度あると聞いております。</p>

<p>(会長)</p>	<p>河川敷の活用についてもお伺いします。ドッグイベント等が開催されていると聞いておりますが、宿泊との関係や波及効果についてはいかがでしょうか。</p>
<p>(事務局)</p>	<p>河川敷で開催されているドッグイベントについては、全国規模の大会も開催されており、県外からの来訪者も多くいらっしゃいます。ただし、来訪者の多くはキャンピングカー等で来られるケースが多く、またイベント自体もキッチンカー等を含めて現地で完結する仕組みが構築されております。</p> <p>そのため、地域内での消費や宿泊への波及効果は限定的であると認識しております。</p>
<p>(委員)</p>	<p>一方で、市民への周知や地域との連携が十分でないようにも感じます。イベント自体は魅力的であっても、市民が存在を知らず参加に至っていないのではないのでしょうか。</p>
<p>(商工観光課)</p>	<p>ご指摘のとおり、ドッグイベント等については、主催者側で完結しているケースが多く、市としても開催を事前に把握できていない場合があります。そのため、地域との連携や周知が十分に図れていないという課題がございます。</p> <p>一部、連携できているイベントについては改善の余地があると考えておりますが、他の民間主導のイベントについては、現状では関与が限定的となっております。</p>
<p>(会長)</p>	<p>イベント自体は文化芸術とは直接関係がないように見えても、例えば犬やバイクといったテーマをきっかけに人が集まり、そこから他の分野へと関心が広がる可能性があると思います。そういった「つなぎ方」を考えることが重要ではないでしょうか。</p>
<p>(委員)</p>	<p>また、河川敷という資源自体についても、市民がその価値に気づいていない可能性があります。外部の視点では非常に魅力的な場所であり、もっとPRしていくべきではないのでしょうか。</p>
<p>(商工観光課)</p>	<p>河川敷の活用については、個別団体による利用が中心であり、市として一体的に公募・企画することが難しい状況にあります。また、公平性の観点から特定の団体のみを取り上げて広報することにも慎重にならざるを</p>

	<p>得ない面がございます。そのため、広報や関与の在り方については課題を感じているところです。</p>
<p>(会長)</p>	<p>その点については、行政が直接関与するのではなく、観光協会のような組織が担うべき役割ではないかと考えます。行政には公平性の制約がありますが、観光協会であればより柔軟な対応が可能ではないでしょうか。</p>
<p>(商工観光課)</p>	<p>観光協会については、これまで自立に向けて行政が一定の支援を行ってきた経緯がありますが、その影響もあり、現在の運営がやや行政的になっている側面もあると感じております。本来であれば、より柔軟な発想で活動していただきたいと考えておりますが、現状としては人員不足や運営体制の課題があるとの認識です。</p> <p>人手不足というよりも、運営の考え方や仕組みの問題ではないかという印象も受けます。その点も含めて、今後議論していく必要があるのではないのでしょうか。</p>
<p>(会長)</p>	<p>文化政策の観点からも、観光協会は重要なプレーヤーであり、今後は継続的に関係性を築きながら議論を深めていく必要があると考えます。計画は策定して終わりではなく、実行段階での伴走が重要になりますので、必要に応じて意見交換の機会を設けることも検討すべきではないでしょうか。</p>
<p>(商工観光課)</p>	<p>観光計画策定当時は、観光協会の実行力が十分ではなかったため、「観光協会が実施主体となる事業」を市側で計画内に書き込み、実行を促す形を取っていました。しかし現在は、観光協会にも主体性や方向性が生まれてきており、今後の計画改定では、行政側から一方的に役割を押し付けるような記載は難しくなると考えています。</p> <p>また、本計画はあくまで市の計画であり、観光協会の計画ではないため、「やってほしいこと」と「実際にできること」の間にギャップが生じる可能性があります。</p>
<p>(会長)</p>	<p>今後、文化芸術の計画を策定する際にも、同様のジレンマが生じる可能性があると感じます。また、最近の観光政策ではDMO（観光地域づくり法人）の考え方が重要視されていますが、観光協会がそのような方向性で動いているかが重要になると思います。</p>

直方市文化芸術審議会 第3回会議 議事録

<p>(商工観光課)</p>	<p>観光協会においては、DMOとしての本来の役割というよりも、制度上のメリットに関心が向いている印象があります。そのため、DMOとして地域を巻き込んでいくという認識が十分かどうかは、今後の課題であると考えています。</p>
<p>(会長)</p>	<p>今後、観光協会との意見交換の機会を設け、認識の共有や方向性のすり合わせを行うことが重要だと思います。</p> <p>本来は本日、議論の整理まで行う予定でしたが、多くの意見が出されたこともあり、十分な整理までは至っていません。</p> <p>本日いただいた意見については、事務局で整理を行っていただき、今後の計画修正に反映していただきたいと思いますと考えています。</p>
<p>(事務局)</p>	<p>今後の進め方としては、次回は「教育」をテーマに議論を行う予定です。</p>
<p>(会長)</p>	<p>審議会は計画を作って終わりではなく、実行段階においても伴走していくことが重要だと思います。</p> <p>本日は多くのご意見をいただき、ありがとうございました。今後も引き続きよろしく願いいたします。</p> <p>以上をもって本日の会議は終了し、今後も継続して議論を深めていくことを確認した上で閉会となりました。</p>

直方市文化芸術審議会 第3回会議 議事録